

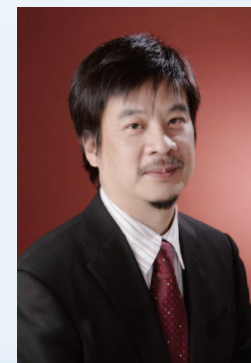
ハチを街なかでも見かける時期が来ました。オス蜂が育ち新しい女王蜂が独立するこの時期はもともと攻撃性のあるスズメバチがより狂暴になる時期です。今年のように雨が多く暑い夏が続いた年はさらに数も増えます。スズメバチやアシナガバチはミツバチなどと違い何度も刺すことのできる針を備えており、毒もスズメバチはより強力で刺された後1週間程度は腫れが残ることがあります。とくにオオスズメバチは攻撃を受けなくても向こうから攻めてくるので厄介です。年間約50名のかたが日本でもハチに刺されてお亡くなりになっていますが、実はその原因はこのハチ毒そのものの毒性ではないのです。

ハチ毒に含まれるフォスホリパーゼAに対するアレルギー反応が原因です。一度ハチに刺された経験のある人の体のなかにその毒に対する記憶(免疫学的な記憶)

が出来ます。その記憶がしっかり形成されればされるほど次に刺されたときにより強く反応するあまりその毒を体の外に追い出す作用が強くなり体に過剰な反応を起こすことがあります。これを免疫を介するアナフィラキシーショックといいます。この反応があまり強くないときは軽いアレルギー症状(咳、かゆみ、気分不快など)で回復しますが、アナフィラキシーになると反応で作られた物質の作用で気道が閉塞し呼吸が出来なくなり血圧が低下しショック状態となります。このショック状態となると15分程度で致命的となります。気道が閉塞のため救命活動をしようにも酸素を肺に送ることが出来ません。このような状態を解除するために気管を拡げるエピネフィリンという物質を可能な限り早く投与しなくてはなりません。エピネフィリン投与はアナフィラキシーショックがどのような原因で起きたとし

ても一番最初に行うべき医療行為です。

数年前からハチに刺されたり食物でのアナフィラキシーに対する処置は医療機関に行ってからでは手遅れになるためエピペンというだれでも使うことのできる使い捨てのエピネフィリンを処方薬として予防的に持つことが出来るようになりました。ハチに刺されてショックを起こした方、強い食物アレルギーのある方は医療機関で検査を受けエピペンを常時携行し万が一の備えを怠らないようにいたしましょう。



にしおか内科  
クリニックRA 院長  
西岡 雄一

専門分野は関節リウマチ、痛風、気管支喘息、漢方薬治療。地元のファミリードクターとして、一般内科も診察。ラジオドクターとしても活躍中。